

私たちが住んでいる地域の
人権課題って何だろう。



「地域のひと・もの・こと」を
教材とした人権教育がしたいな。

地域 みんなが人権について
自分事として学べるといいな。

地域リーダー
(地域における人権教育推進者)

当事者の方々と交流を深めながら
学習していきたいな。

人権教育リーフレット いま ここから 自分から 4

～地域のひと・もの・ことをいかして～

「何があったの？」—その問いから学びがはじまる

長野県内には、飯田・下伊那をはじめとして、様々な地域に「満蒙開拓団」や「満蒙開拓青少年義勇軍」の石碑があります。ひっそりと建つ石碑は、満蒙開拓をめぐる苦難の歴史を赤裸々に物語っているようです。

「満蒙開拓団」とは、中国東北部に一九三二年から十三年間だけ存在した「満州国」に、日本全国から渡っていった農業移民の方々です。当時、疲弊していた農村の土地対策と人減らし、それにシベリアでのソ連からの防衛と現地軍隊への物資の供給といった軍事目的が合致し、国策として進められたものです。開拓団として海を渡ったのは大人ばかりではありません。数え年で十六〜十九歳の青少年も対象となり、「満蒙開拓青少年義勇軍」として参加しました。

それは、今を生きる中国帰国者の「今日的な人権問題」につながる悲しい史実です。



【第三次とりまとめ】では、効果的な学習教材の選定・開発について、次のように示しています。

人権が尊重される社会づくりを自らの問題としてとらえ、自ら考えることができるようにするなどの教育効果を高めるため、身近な事柄を取り上げたり、児童生徒の興味・関心をいかしたりするといった教材の内容面での創意工夫を行っていきましょう。

効果的な教材例として、「地域の教材化」「外部講師の講話やふれあいの教材化」「保護者や地域関係者と共に作る教材」「歴史的事象の教材化」「教材を通して、よりよい出会いをつくるための教材」などがあげられています。

地域素材の発掘と教材化 ～思い描いてみましょう！～

満蒙開拓平和記念館を見学する



「満蒙開拓団」や「満蒙開拓青少年義勇軍」に関する歴史的事実や背景について知識・理解を深めることができます。特に長野県は全国最大規模となる約33,000人を超える移民を送り出したという史実に出会い、その数字の意味を追究することができます。また、実際の映像を通して当時の様子に思いをめぐらせたり、中国帰国者の証言にふれたりすることができます。
(満蒙開拓平和記念館 下伊那郡阿智村駒場711-10)

何をどのように教材化したらいいな？

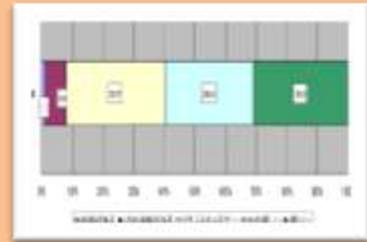


【「満蒙開拓団」としての県別移民数】
「満蒙開拓の国策を最も推進した県が長野県である」という史実を知る資料として活用できそうかな。



地域リーダー

(地域における人権教育推進者) 習ができそうかな。



【中国帰国者の就労状況や生活環境等に関する意識調査】

中国帰国者の人権について考え合う学習ができそうかな。

「満蒙開拓をめぐる歴史」を教材化して、

地域の人権課題についてみんなで学習を深めたい！

満蒙開拓平和記念館や長岳寺（中国残留邦人の肉親捜しに尽力した山本慈昭さんが住職であったお寺）を訪れ、「満蒙開拓をめぐる歴史」について体験的に学び合い、満州から中国帰国者となって生活する当事者や家族と交流し、その思いにふれることを通して、「中国帰国者の人権課題」を自分事として考えていけるといいな。



中国帰国者の家族が綴る作文を読む

「日本語が下手なおじいちゃん」大橋 遼太郎さん
(平成23年度 豊丘村立豊丘南小学校6年)

中国帰国者の家族が抱える現実や思いにふれ、「中国帰国者の人権」について問い直すとともに、「今の自分にできること」を考えるための資料にすることができます。

満州移民を語り継ごうとする方々と交流する



地域に残る満州移民の記憶を聞き取り、体験者の記憶と思いを綴った「証言集」をもとに、当事者や研究者の方々と交流することを通して、現在も続いている「満蒙開拓をめぐる歴史」の問題について明らかにすることができます。

こんなふうに学習したい！

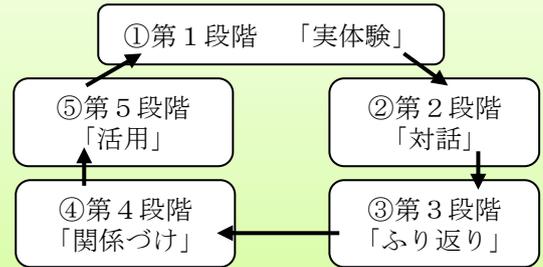
- ① 地域教材（地域のひと・もの・こと）に出会い、ふれあう「**実体験**」を通して、はっとしたり、心をふるわせたりするような学習をしたい。
- ② 地域教材を通して感じたり考えたりしたことを身のまわりの人たちと気軽に「**対話**」できるようにしたい。また、地域・学校・家庭において、みんなの共通の話題にしていきたい。
- ③ 地域教材にふれるなかで、自分の見方や考え方、生き方やあり方について「**ふり返り**」たい。
- ④ 日常的に起きている様々な事柄と「**関係づけ**」で考えていけるようにしたい。
- ⑤ 地域教材から学んだことを「**活用**」しながら、いま・ここから・自分から行動したい。

人権教育の指導方法の工夫

【第三次とりまとめ】「体験的な学習」に関して

個々の学習者の体験をはじめとして、他の学習者との協働作業としての「話し合い」、「反省」、「現実生活と関連させた思考」の段階を経て、「自己の行動や態度への適用」へと進んでいくと考えられます。

「体験的な学習に関して」(指導等の在り方編 P.28) をもとに構想した“学びのサイクル”



キーワード

～感じ 考え 行動する 学びへ～

- ① 実体験 ② 対話 ③ ふり返り ④ 関係づけ ⑤ 活用

① 実体験

【学習のねらい】 満蒙開拓に関わる様々なできごとにふれ、自分なりの思いや考えをもつ。

地域に建つ石碑を見学する

— 県内各他の拓魂碑
(招魂碑、慰霊碑) —



〈県護国神社〉(松本市)



〈善光寺雲上殿〉(長野市)



〈貞松院〉(諏訪市)



〈諏訪神社〉(木曾郡木祖村)



〈薬師寺〉(佐久市)

「満蒙開拓」をめぐる長野県内ではどんなことが起きたのかな。



映像資料『蒼い記憶 満州開拓と少年たち』を観る

「蒼い記憶 満州開拓と少年たち」1993年アニメ映画(90分)
漫画“シリーズ戦争”(草土文化刊)の第一巻『蒼い記憶』をアニメーション化。終戦直後、満蒙開拓団の引き上げ時に起こった悲劇を描く。
※YouTubeにて「平成25年度日本郵政の年賀寄附金の助成」を受けて配信されています。(2016年2月現在)

満蒙開拓平和記念館を見学する



【満蒙開拓青少年義勇軍として満州へ入植する決意を語る子どもたち】

青少年義勇軍の多くは、「満州には豊かなくらしかがある」といった教師や役人たちの言葉を信じて渡満したと言われています。長野県内には、中国帰国者(二、三世を含む)として、約4,150人の人たちが暮らしています。

(2015年県健康福祉部地域福祉課調べ)

② 対話

【学習のねらい】身のまわりの人たちと語り合う中で、自分の見方や考え方を広げる。



【地域の語り部の方からお話を聞く中学生】

仲間や家族との対話

こんなにも身近に「満蒙開拓」をめぐる悲しい出来事があったなんて、気付かなかった。16歳の自分が「満蒙開拓青少年義勇軍」として満州に行ったとしても、やっていかれないだろう。自分の子どもを満州に送り出した親の気持ちを考えると胸が張り裂けそう。仲間も家族もみんながつかったんだ。

地域のお年寄り（語り部）との対話

満州で家族が生き別れになったこと、病気の弟を川へ置き捨ててこなければならなかったこと、帰ってきてからも仕事になかなか就けなかったことなど、つらいお話を聞いて、居ても立ってもいられない。

地域の有識者や専門家との対話

私たちの地域に「満蒙開拓団」や「青少年義勇軍」として満州国に渡り開拓に従事して、敗戦の混乱の中で、命を落としたり、自ら命を絶ったりした人たちが、こんなにもいたなんて…。もっと詳しく知りたい。



いろいろな人たちと語り合う中で、「決して忘れてはならないことだ」と強く思いました。「過去の出来事」と考えていたけど、今も苦しみは続いているのかもしれない。解決に向けて私たちはどうしたらいいのでしょうか。

③ ふり返り

【学習のねらい】これまでの自分の見方や考え方についてふり返り、自分事として考える。



現代の地域社会や学校にも、つらくて困難な生活を余儀なくされている中国帰国者や家族の人たちがいるんだと思います。その方々に自分は思いやることができているのかなあ…？



中国から帰国してからも実際に大変な体験をされてきたKさんのお話からふり返ろう。

（「下伊那の中の満州 聞き書き報告集10」より）

～大変だった病院通い～

おかあは日本に来て子ども産んで、4歳まで保育園入れんもんで、ずっとうちで子どもの面倒をみとったんな。長女と長男、肺が悪いもんで、毎週1回、市立病院に連れて行っとったんな。言葉も分からんし、バス停まで歩いて。バス1日2、3本しかないもんで。市立病院混んどるじゃん。朝8時半には小さい子どもおんぶして、子ども5人、みんな連れて行っったんな。

言葉が通じないと病院に行くだけでも困るよね。困っていることに気づいてなかったな。自分から声をかけたい。



～「中国人」と言われて悲しかった～
おれ「中国人」って言われて悲しかった。けんかして「おまえ中国人、だめだ」って言われて。仕事の内容説明してくれて、最初、言葉分からんじゃん。いくら言ったってどういう意味かってまだ分からんじゃん。「中国人だめ」だって。話も聞かないってな。これ、おれ悲しくてな。

その場においても『中国人』って差別するなよ！』とは言えないかも…。Kさんの「おれ悲しくてな」という言葉で感じた思いを、大事にした

満州では「日本人」と言われ、帰ってきたら「中国人」と言われ…つらい目にあっているんだな。歴史の悲惨さとともに、今の苦しみについても見ていく自分でありたいと思う。



歴史的事実や背景とともに、これまでの自分の見方、考え方をふり返りながら、地域や学校における中国帰国者や家族の人たちが抱える人権問題について、見直すことができましたね。

④ 関係づけ

【学習のねらい】 学習したことと日常の中での様々な出来事とを関係づけて考え、自分ができることを見つける。

自分たちが知らないだけで、近所に中国帰国者（家族）の人が住んでいるかもしれないよね。日本語に不自由したり、自分の思いを近くの人に伝えられなかったりして、地域にうまく馴染めていない中国帰国者の方がいたら、みんなはどうしようと思う？



事例1

作文を読み、語り合うことを通して、当事者や家族が抱えている真実と向き合おう
中国帰国者の家族が綴った作文を読み、抱える現実や思いにふれ、「中国帰国者の人権」について問い直すとともに、今の自分ができることを考えましょう。

（作文は、長野県同和教育推進協議会「あけぼの」小学生高学年向けに掲載されています）

「日本語が下手なおじいちゃん」 豊丘村立豊丘南小学校（平成23年度）6年 大橋遼太郎さん
第21回島根県雲南市永井隆平和賞小学生高学年の部「最優秀賞」作品（P5参照）

おじいちゃんがおかしな日本語を話したりすると恥ずかしいと思うけど、「人と人との間には国境はない」という大切なことを教えてくれたので、きっと誇りに思っているよ。



李君は大橋君の気持ちを分かっている声がかけたんじゃないかな。困っている時こそ助けるのが友だち。私も相手の思いを感じて声をかけたい。

「日本語が下手なおじいちゃん」

豊丘村立豊丘南小学校

六年 大橋 遼太郎

僕のおじいちゃんは日本語が下手です。「カボチャ」のことを「カンボジャ」、「リング」のことを「リングア」と言ったりします。

おじいちゃんは、満州開拓団のひいおじいちゃんといひおばあちゃんと一緒に中国の満州という所で暮らしていましたが、戦争で孤児になってしまったそうです。その時、おじいちゃんは五歳だったそうです。

おじいちゃんは、「日本と中国が戦争していたのに、日本人のおじいちゃんを大事に育ててくれた中国人がいたんだよ。人と人の間には国境はないんだよ。」といつも遠くを見つめるような目をしながら言います。

そんなおじいちゃんが住んでいた中国に、お母さんの用事で僕も三年間暮らすことになりました。その中国で僕は味わったことのない体験をしたのです。

僕が通っていた北京の今典小学校には、日本人は僕一人しかいませんでした。

「抗日戦争」がテーマになった授業の時のことを僕は昨日のことのように忘れることができません。

授業が始まって、国語の教科書をめくると日本兵が中国人をやりで刺そうとしている挿絵が目に見えませんでした。最初、僕は挿絵の意味が分かりませんでした。しかし、だんだん気持ち悪くなって来ました。

国語の賈先生はいつもとても優しい口調で話すので、僕の一番好きな先生です。でも、この時だけは怖い声で日本人の僕を責めているように聞こえました。僕は悲しくなって、教室から逃げ出したい気持ちになりました。

「戦争の話なんて嫌だ！早く終わってくれ！」と心の中で祈り続けました。中国の学校へ通って三年目。四十分間の授業がこんなに長いと感じたことは初めてでした。

ようやく授業の終りのチャイムが鳴りました。しかし僕は動けませんでした。

「もう誰も日本人の僕と遊んでくれないかもしれない。どうしよう……。」僕はもう授業前の僕ではないような気がしました。

「卓球やりに行こう！」と一番仲良しになった李君の声がしました。僕はびっくりしたと同時に、じわじわと涙があふれそうになりました。「李君ありがとう。本当にありがとう。」

「人と人との間には国境はない。」この時初めておじいちゃんの口ぐせの意味が分かったような気がしました。

しかし、それ以来、「戦争をなくすためにはどうすればいいのだろう。戦争をなくすためには僕は具体的に何をすべきだろう」といつも僕の頭の中でこの言葉が追いかけています。僕は何をすべきか、その答えを見つげるために、怖くても、悲しくても、逃げ出したくなくても、勇気を出して戦争のことについて深く勉強しようと思います。

おじいちゃんは今でもおかしな日本語を話します。でも、これからはおじいちゃんに優しく日本語を教えてあげたいと思います。

遼太郎さんの祖父は、旧満州に渡った開拓団員の家族と終戦時に離散し、5歳から中国人に育てられた残留孤児です。

遼太郎さんの母は、祖父と中国人の祖母の長女として中国で生まれ、8歳で一家と永住帰国しました。遼太郎さんは、平成19年からの3年間、北京師範大学に留学することになった母親といっしょに中国へ渡り、現地の小学校で学んだ経験があります。



事例2

当事者から抱えていた思いをお聞きし、自分と向き合うことの意義を考えよう
日々の暮らしの中で、様々な悩みや不安を抱えながらも、精一杯生きてきた当事者のOさん（中国帰国者二世）のお話を聞き、胸に秘めていた思いに向き合い乗り越えてきた姿から、自分のこれまでの姿と重ねて考え、できることを見つけていこう。

Oさんのお話から

日本で生きていくために必死に日本語の勉強をしました。そんなある時、友達が欲しい一心で、いっしょうけんめい覚えた日本語を話したら、ある子に「中国人だ！中国人は発音がおかしい。」と言われ、学校中にそのことが広まって、まねをしてからかわれたことがありました。今考えてみても本当に切ない思い出です。



【教室で語るOさん】

高校に入ると、同じ地域の人がいなくなりました。自分は中国帰国者二世であることを隠そうとしました。そうすれば、「中国人」って言われたりからかわれたりすることもないだろうと思ったからです。

大学へ行ったら、中国からの留学生がいましたが、そういう人たちと話せませんでした。また、すごく仲良くなった友達にも言えませんでした。昔の話が出たときには、日本の保育園に行っていたように「うそ」をついていました。そういう自分もいやだったし、すごく仲良くなった友達にも言えないことが本当につらかったです。でも、言ってしまうのもすごく怖かったです。

大学卒業後、今の仕事に就いて、子どもと関わるようになりました。そんな時、中国帰国者三世のAさんと出会いました。友だちとトラブルの多かったAさんを見ていて私はいてもたってもいられませんでした。「分かってくれる友だちなんていない」と言うAさんの思いは私の経験した思いそのものでした。Aさんに向き合い、一緒に解決していきましました。そういうことがあって、私も自分自身と向き合えることができました。

まわりに理解してもらえずに、ずっと苦しんできたOさんのような人が、私たちの地域にもいるんじゃないかな。安心して「中国から来たんだよ」と言ってもらえるように、みんなで話し合って考え合いたいな。身近な人に向き合うって、大切なことなんだよね。



中国で生まれ育った経緯やそれに伴う困難を、まわりに言えずに隠し続けてきたOさんは、とてもつらかったと思います。

私の父も、仕事で中国に行っていますが、はじめのうちは言葉や習慣が分からず、人との関わりもうまくいかなくてつらかったそうです。私は、父の話から日本と中国の文化の違いを感じました。私は、外国から日本に来て困っている人には、言葉は通じないかもしれないから、身振り手振りで伝えたり、日本の文化については詳しく説明したりして、手助けしたいです。



これまでの自分をふり返った時、相手のことを思いやっていたことに気づいたけど、当事者やその家族の方の熱い思いにふれて、自分ができることをやりたい、という気持ちを強くすることができましたね。



⑤ 活用

【学習のねらい】学習してきたことを具体的な場面で、態度や行動にあらわす。

中国帰国者や家族の人たち、また、外国から日本に来て困っている人たちに、いろいろな支援をしている方々がいるって聞きました。私たちにもできそうなことがありますよね。



～帰国者サロン教室～

もともと「高齢者向け日本語教室」を行っていましたが、日本語の学習だけでなく、絵手紙教室や、健康づくりを兼ねた体操やマレットゴルフ大会、春のお花見等、親睦・交流など引きこもり対策も取り入れて帰国者サロン教室の活動をしています。帰国者、帰国者二世、三世、支援者等が楽しみながら、地域をあげて取り組んでいます。

～医療通訳派遣～

医療通訳として務めている帰国者二世のHさんは「みんなの苦しみ分かるから、見て見ぬふりはできない」と、1ヶ月で約200人の患者さんの通訳をしています。「正確に訳し、患者さんの気持ちを大切にすること」を心がけています。医療通訳の仕事は、命に関わることもあり、患者と医師の間に入って、双方の信頼関係を最も大事にし、親身になって取り組んでいます。

地域主催の慰霊祭（戦没者並びに開拓犠牲者追悼式）に参列しました。慰霊碑を前にして、みんなで校歌を歌いました。この地域の先祖の方々に思いを巡らせ、これからの自分の姿やあり方を問い直しました。



【地域主催の慰霊祭】



【慰霊祭に参列する中学生】

私は、満蒙開拓にかかわる「忘れてはならない真実」を、文化祭の意見発表会のような場で、私たちの後の世代にも伝えていきたいです。そして、みんなが住みやすく居心地のよい地域づくりに向けて、自分ができることに取り組み、その取り組みの様子もみんなに伝えていきたいです。



【文化祭での意見発表の様子】

結婚して日本に来た方を講師にして「キムチ漬け教室」や「餃子作り教室」等の講座が開かれているみたい。一緒に作って食べて、祖国の話や悩みを聞いて、仲良くなっているんだって。日本の文化を教えることだけじゃなくて、いろいろな国の文化を教わって、この地域に取り入れていくことができればいいよね。



《人権教育リーフレットの作成にあたって》

「満蒙開拓をめぐる歴史」を教材化した学習事例や関係資料等の編集・掲載等については、満蒙開拓平和記念館、泰阜村立泰阜中学校、飯田市立山本小学校、飯田日中友好協会、その他関係者の皆さまのご協力をいただきました。